

Ⅱ 左京六条三坊十四坪

1 検出遺構

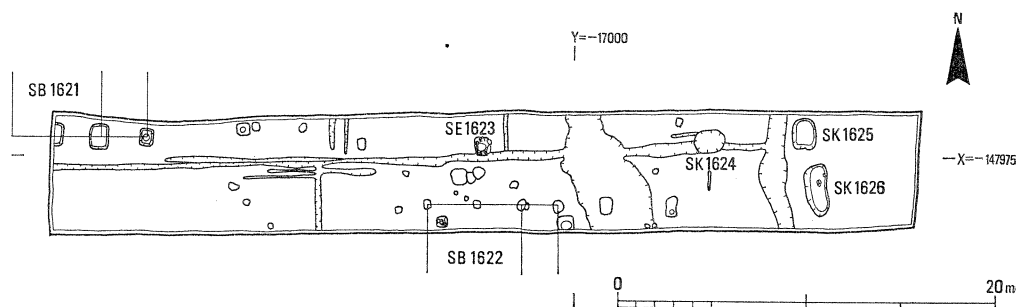
調査地は 大安寺小学校と道をへだてた西側の同校 校舎移転予定地の水田で、東西80m、南北40mの範囲である。調査が始まる前にすでに2m近い厚さの盛土造成が終っており、奈良時代の遺構面までの深さを考えると相当量の排土処理が必要であるため、予定地内の東北によせて、東西長50m、南北幅10mの発掘区を設定した。しかし、盛土が深かったため、実質的に調査ができたのは、東西46m、南北6mの範囲である。盛土を除いた旧水田面から遺構面までは比較的浅く、厚さ約0.2mの水田耕土と床土の下に、奈良時代から中世までの遺物を含んだ厚さ平均0.2mの遺物包含層があり、これを除いた面で奈良時代の建物2、平安時代末期の井戸1、土塋3、時期不明の溝などを検出した。遺構面は東で高く、西で低くなっており、発掘区内での比高差は約0.4mである。遺構面の高低に反比例して、遺物包含層は東ではきわめてうすく、反対に西へ行くにしたがって厚くなっている。遺構面から下は、粘土・砂・砂利が混在した自然堆積層で、遺物を含まない。

(1) 掘立柱建物

発掘区内において掘形規模の異なる掘立柱柱穴31を検出した。そのほとんどが整然とした柱列をなさないが、2棟の建物（SB1621・SB1622）が復原できた。

SB1621は、発掘区西北隅で検出した掘立柱建物で、東西に並んだ3ヶ所2間分の掘形を確認した。このうち、中央の掘形規模は今回検出した柱穴中ではもっとも大きく、長辺1.3m、短辺1mの長方形で、掘形中に円形の柱痕跡を残し、柱痕跡の直径は25cmである。柱痕跡から土師器・須恵器・製塩土器が少量出土した。柱間寸法は8尺等間である。ただし、東端の掘形は西側2ヶ所のそれに比して規模が小さく、これを廂とすれば、梁行2間で、東に廂のつく南北棟と考えられる。

SB1622は、発掘区中央南端で検出した掘立柱建物で、東西に並ぶ3間分、4ヶ所の掘形を確認した。掘形は一辺0.4m内外の小規模なもので、直径15cmの柱痕跡がある。梁行2間の身舎の東に片廂のとりつく南北棟と考えられる。柱間寸法は身舎が梁行2間8尺等間、廂の出は7尺である。SB1622の柱痕跡から、土師器・須恵器・製塩土器の小片が少量出土した。



第2図 発掘遺構図

(2) 井戸

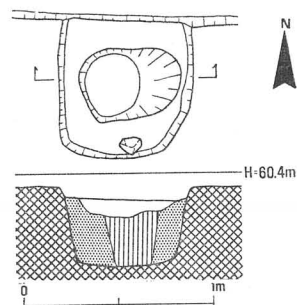
発掘区中央北寄りで、井戸 S E 1623を検出した。一辺0.9mの方形の掘形の中央やや西に偏って、底板を抜いた曲物をおき、周囲に凝灰岩切石や大小の自然石をつめて裏込めとしている。曲物は土圧によってわずかに楕円形に歪んでいるが、もとの直径は39cmと推定され、底部から16.5cmの高さまで残っていた。深さは遺構検出面から底まで0.62mである。埋土中から瓦器、土師器、黒色土器などの土器類と、軒丸瓦、凝灰岩切石各1点が出土した。凝灰岩切石は直角二等辺三角形で短辺22.5cm、厚さ18.6cmで、階段の耳石下のはめ石であろう。また、裏込めとして用いられたものの中に凝灰岩の長方形切石が1点あり、これらの凝灰岩は本来、大安寺で用いられていたものであろう。井戸の終末は平安時代末期である。

(3) 土 壙

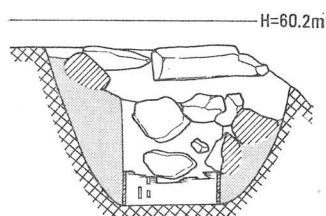
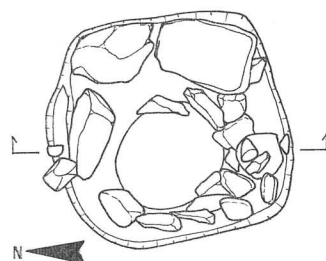
発掘区東部で土壙 S K 1624・S K 1625・S K 1626を検出した。いずれも不整円形の浅いもので、埋土中には大小の自然石や瓦類、土器類があり、S K 1624と S K 1625では木炭や灰も混っていた。S K 1624から土師器、黒色土器、瓦器、S K 1625から瓦器、S K 1626から土師器、瓦器が出土し、平安時代末期に属するものと考えられる。

(4) 溝

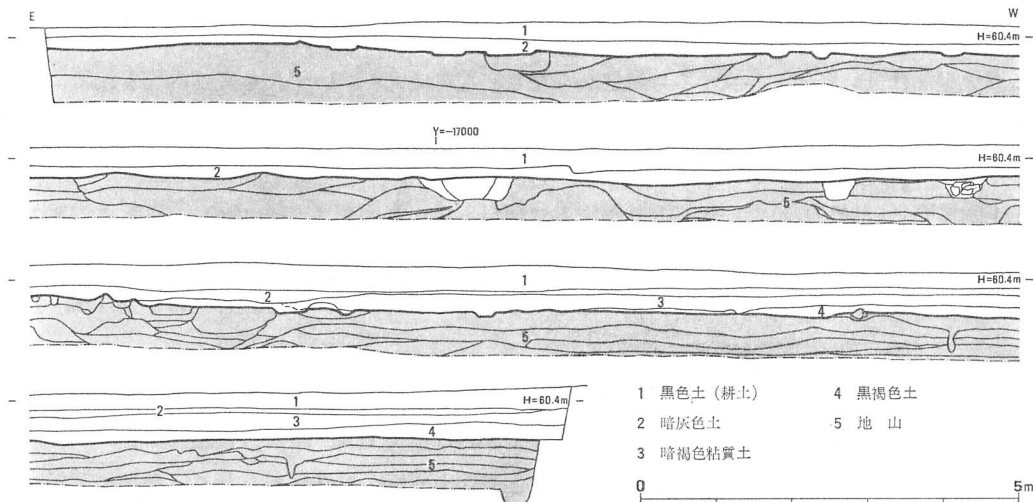
発掘区内で東西方向あるいは南北方向の素掘りの溝を検出した。奈良時代に属するものはなく、時期も不明である。



第3図 S B 1621柱穴



第4図 S E 1623



第5図 南壁土層図

2 遺 物

(1) 土 器 (第6・7図、図版7)

掘立柱建物 S B 1621・S B 1622、井戸 S E 1623、土壇 S K 1624・S K 1625・S K 1626などの遺構や発掘区の全域に広がる包含層から、土師器、須恵器、黒色土器、灰釉陶器、緑釉陶器、瓦器、製塩土器などの土器類が少量出土した。このうち、S B 1621・S B 1622出土土器は奈良時代後半に属し、S E 1623・S K 1624・S K 1625・S K 1626出土土器は平安時代末期に属するものである。

S K 1626出土土器 土壇 S K 1626から土師器皿・甕、黒色土器碗が出土した。

土師器皿 (1～3・6) には口径10cm前後の小型のもの (1～3) と、口径18cm前後の大型のもの (6) とがある。小型品には口縁部が強く屈曲し、端部を内側へ巻きこんだ薄手のもの (1・3) と、口縁部が外反し、端部の丸い厚手のもの (2) とがある。大型品の口縁部は外反する。いずれも底部内面をなで、口縁部を横なでし、底部外面は調整しない。1は口径9.5cm、高さ1.5cm。2は口径9.8cm、高さ1.1cm。3は口径11.0cm、高さ1.4cm。6は口径18.2cm、高さ2cm。

土師器甕 (7) は丸い体部と外反する口縁部からなり、口縁部は外反し、端部は内側へわずかに巻きこんでいる。口縁部を横なで、体部内外面をなでて仕上げる。外面に煤が付着する。口径18.4cm。

黒色土器碗 (4・5) は平らな底部と大きく開く口縁部からなり、高台がつく。底部内面に放射状、口縁部の内外に水平なヘラ磨きがある。外面のヘラ磨きは粗い。高台は幅広く低い。内面が黒色を呈する。4は口径15.0cm、高さ5.5cm。5は口径14.8cm。

S K 1624出土土器 土壇 S K 1624から土師器皿・甕・羽釜、須恵器壺、黒色土器碗、灰釉陶器碗・瓶、瓦器碗が出土した。

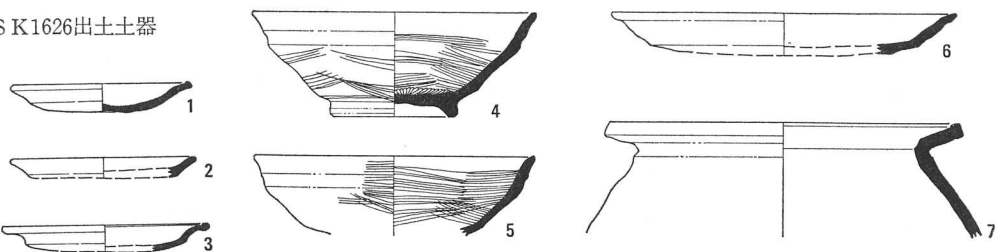
土師器皿 (8～10) には口径10cm前後の小型のもの (8・9) と、口径15cmのやや大型のもの (10) とがある。小型品は口縁部が強く屈曲し、端部を内側へ巻きこんだ薄手のものである。大型品は丸い底部と外反する口縁部からなり、端部は丸い。いずれも底部内面をなで、口縁部の内外を横なでし、底部外面は調整しない。8は口径8.6cm、高さ1.5cm。9は口径10.4cm、高さ1.0cm。10は口径14.8cm、高さ約3cm。

土師器甕 (17～19) は丸い体部と外反する口縁部からなり、口縁端部を内側へ巻きこむもの (18) と、端部が上へ突出するもの (17・19) とがある。口縁部を横なで、体部内外面をなでて調整し、外面のなでの下にハケメを一部のこすものが1例 (19) ある。17は口径25.0cm。18は口径26.0cm。19は口径14.8cm。

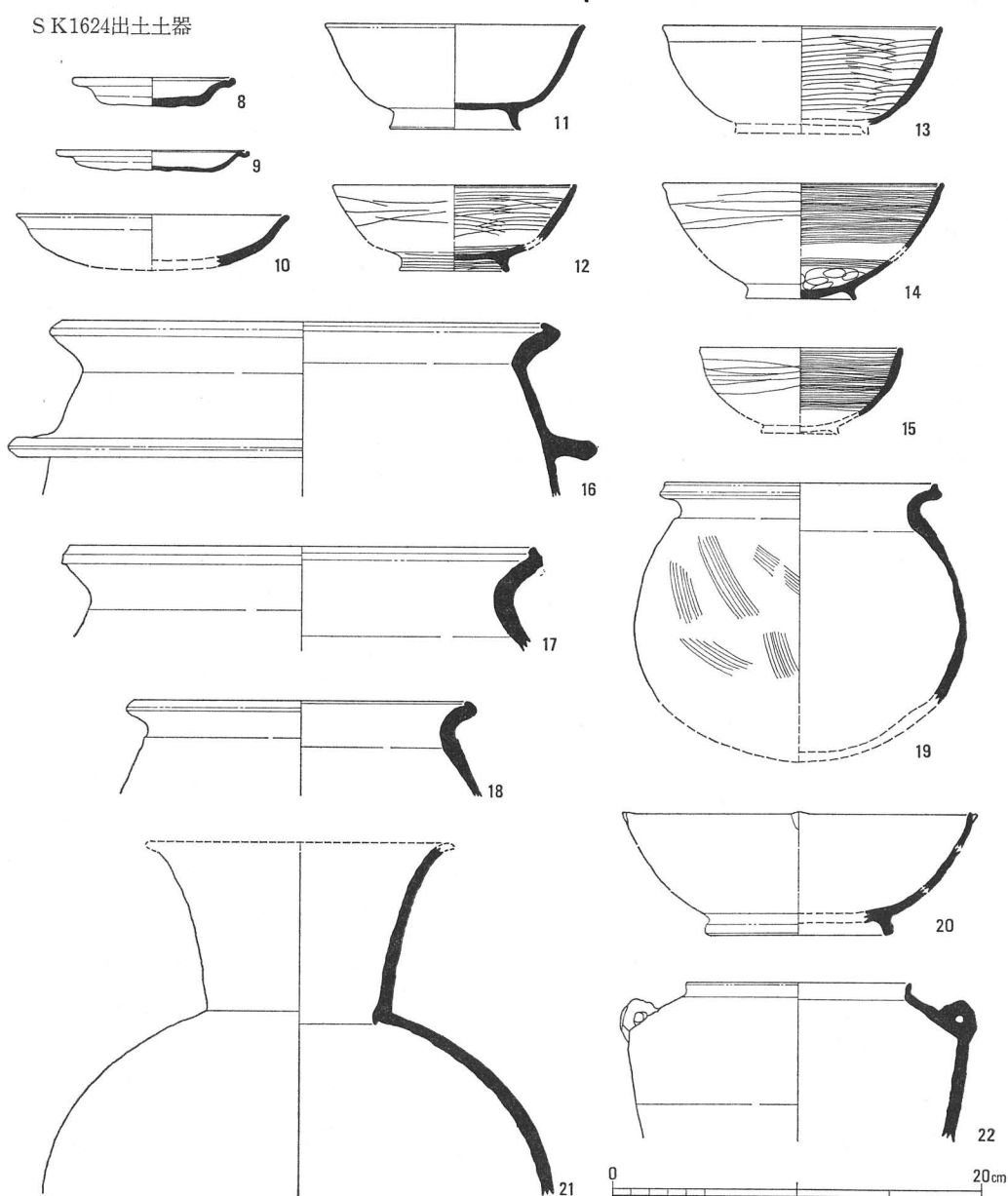
土師器羽釜 (16) は甕の体部に鋳をめぐらしたもので、口縁端部は内側へ巻きこんでいる。口縁部と鋳部を横なで、体部内外をなでて調整する。口径26.0cm、鋳部外径31.8cm。

須恵器壺 (22) は肩部の直線的にはった体部と直立する短い口縁部からなり、肩部に耳がつく。耳はヘラで削って面取りしたもので、直径0.4cmの円孔があく。口径12.0cm。

S K1626出土土器



S K1624出土土器



第6図 土器 (1~3・6~10・16~19 土師器、4・5・11~13 黒色土器、14・15 瓦器、20・21 灰釉陶器、22 須恵器)

黒色土器碗（11～13）は平らな底部と内弯する口縁部からなり、高台がつく。口縁端部には外反するもの（11）と、内弯するもの（12・13）とがあり、後者には端部内側に沈線が1条めぐる。いずれも内面が黒色を呈する。口縁部外面はヘラで削って平滑にしあげている。器面の内外をヘラで磨くもの（12）と、内面のみ磨くもの（13）、ヘラ磨きのないもの（11）とがある。11の高台はうすく高い。11は口径13.8cm、高さ5.7cm。12は口径13.2cm。13は口径15.2cm。なお、このほかに内外面とも黒色をした碗がごく少量ある。

灰釉陶器碗（20）は口縁部を一部内側へ折りまげた輪花碗で、口縁部の内外に白緑色の釉がうすくかかっている。高台は断面三角形状を呈し、底部内面には重ね焼きの痕跡がのこる。口径19.2cm、高さ6.5cm。

灰釉陶器瓶（21）は肩のはった丸い体部に外反する長い口頸部のつくものである。体部と口頸部の接合は一段構成で、体部外面下半をヘラで削っている。外面全面に濃い緑色の釉があつくかかっている。ほかに同形の小型品が1点ある。

瓦器碗（14・15）は内弯する底部と口縁部からなり、高台がつく。口縁端部内側には沈線が1条めぐる。内面の底部にラセン状、口縁部に水平方向のヘラ磨きがある。口縁部外面のヘラ磨きは粗い。14は口径15.2cm、高さ6.0cm。15は口径約11cm。

SE1623出土土器 井戸SE1623から土師器皿・羽釜、須恵器甕・高杯、黒色土器碗、灰釉陶器碗、緑釉陶器碗、瓦器碗・皿が出土した。このうち、須恵器甕・高杯、灰釉陶器碗、緑釉陶器碗はいずれも小片であり、原形はわからない。

土師器皿（24～26）には口径10cm前後の小型のもの（24・25）と、口径14cm前後のやや大型のもの（26）とがある。小型品には口縁部が強く屈曲し、端部が上へ突出するもの（24）と、口縁部が内弯し、端部の丸いもの（25）とがある。大型品は丸みのある底と外反する口縁部からなる。いずれも底部内面をなで、口縁部を横なでし、底部外面は調整しない。24は口径9.4cm、高さ1.8cm。25は口径10.8cm、高さ2.1cm。26は口径13.6cm、高さ約3cm。

土師器羽釜（29）は体部に鏝のめぐるもので、口縁部は外反し、端部は内側へ巻きこんでいる。口縁部を横なで、体部の内外をなでて調整する。口径19.4cm、鏝部外径26.0cm。

瓦器碗（27・28）は内弯する口縁部をもち、端部内側には沈線が1条めぐる。いずれも口縁部内面を水平方向に密にヘラで磨いており、底部にラセン状のヘラ磨きを施したものが1例ある（27）。口縁部の外面には粗いヘラ磨きがあり、外面を3回のヘラ磨きによって一周しているものが1例（28）ある。27は口径14.2cm、高さ約6cm。28は口径15.2cm、高さ約5.5cm。

瓦器皿（23）は平らな底部と外反する短い口縁部からなり、端部は丸い。口径10.0cm、高さ1.5cm。

SB1621出土土器 掘立柱建物SB1621の柱痕跡から土師器皿・碗・壺・甕・カマド、須恵器杯・蓋・壺、製塩土器が出土した。

土師器皿（35）は平らな底部と外傾する口縁部からなり、口縁端部は内側に巻きこんでいる。底部内面をなで、口縁部を横なでし、底部外面をヘラで削る。口径13.6cm、高さ2.1cm。

土師器碗(34)は外傾する口縁部の破片で、内面を横なで、外面をヘラで削ってしあげている。口径13.6cm。

土師器甕(36)は丸い体部と外反する口縁部からなり、口縁端部はわずかに内側へ巻きこんでいる。口縁部を横なで、体部の内外をなでて調整し、外面のなでの下にはかすかにハケメの痕跡を残している。口径24.2cm。

土師器壺は薬壺形の壺の底部小片、カマドはひさしの下底部破片である。

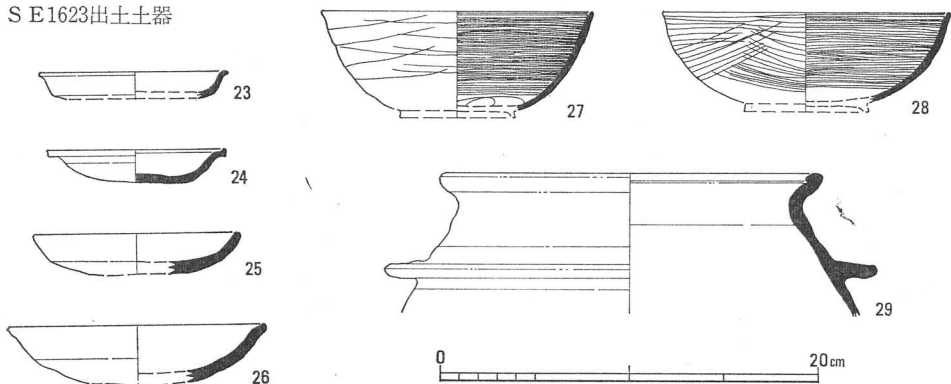
須恵器杯(33)は高台のつく底部破片である。底部にヘラ切り痕をのこす。

須恵器蓋(30・31)には平らな頂部と垂直な短い縁部からなるもの(30)と、平らな頂部とやや屈曲する縁部からなるもの(31)とがある。前者には平らな宝珠つまみがつき、外面全面に緑色の自然釉があつくかかっている。30は口径10.5cm、高さ2.5cm。31は口径16.4cm。

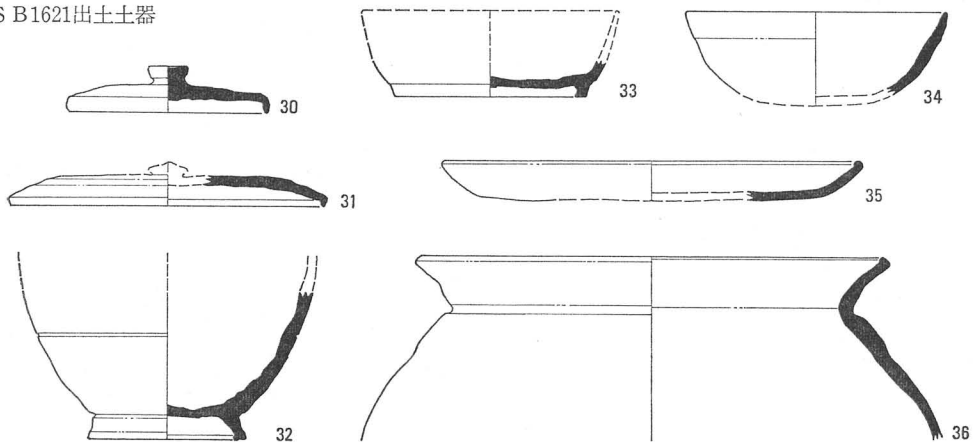
製塩土器は胎土に多量の砂粒を含んだ粗製のものである。小片のため原形はわからない。

以上の遺構以外では、S B1622の柱痕跡から土師器、須恵器、製塩土器が少量出土した。また、包含層から緑釉陶器碗、灰釉陶器蓋の小片が出土している。灰釉陶器蓋は口径4.4cm、縁部の高さ0.5cmの小さな蓋で、外面全面に黄緑色の釉があつくかかっている(図版7)。

S E1623出土土器



S B1621出土土器



第7図 土器(24~26・29・34~36 土師器、23・27・28 瓦器、30~33 須恵器)

(2) 瓦 (第8図、図版8)

出土の瓦類はごく少量で、丸・平瓦数片、軒丸瓦2点、軒平瓦2点、塼1点である。

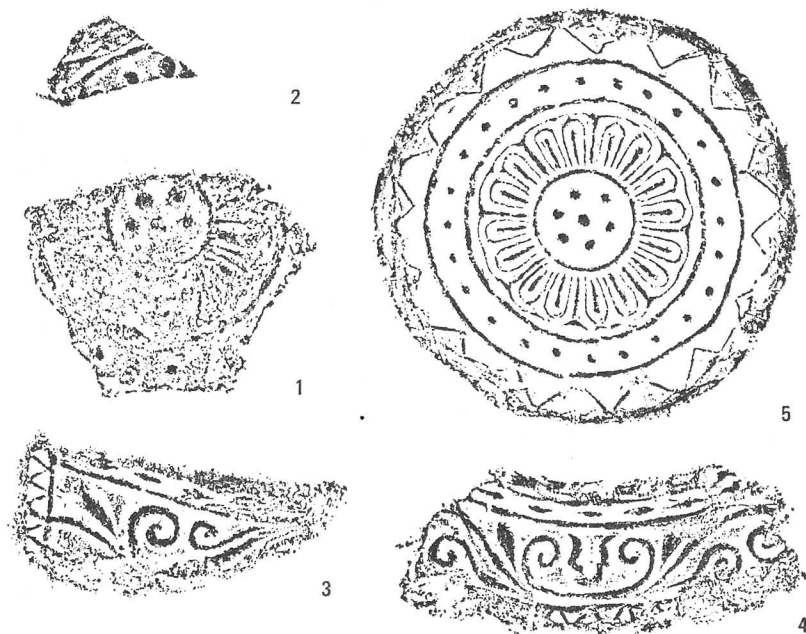
1は内区に複弁8弁蓮華文をおく軒丸瓦である。瓦当厚は4.7cmである。中房は弁区よりやや低い。蓮弁は反転を示さず平板につくる。間弁は長く伸び、界線のように蓮弁を区画する。遺存状況は悪いが、同型式の平城宮所用瓦(第8図5)でみると外区内縁に珠文を、外縁に線鋸齒文^(註)をめぐらす。平城京内で本型式に属するものは羅城門地域の発掘調査で出土している。2は外区にやや大ぶりの珠文3個を残すだけの小片である。珠文帯の外側に圈線を残すが、外縁を欠失しているので鋸齒文の有無はわからない。

3・4は同型式の軒平瓦で、均整唐草文を内区に飾り、上外区に楕円珠文、脇区と下外区に線鋸齒文をおく。大官大寺式と称せられ、大官大寺出土瓦と同範である。

さて、さきに軒丸瓦1の同範品が羅城門地域で出土していること、そしてこれが平城宮所用瓦と同範関係にあることにふれた。羅城門地域では、朱雀大路と九条大路の交差点の右京築地西側と、朱雀大路西側溝から瓦類が出土した。今回の調査では、築地を検出することはできなかったが、東三坊大路沿いで平城宮所用瓦と同範の軒丸瓦が出土していることは、それらの瓦が官営工房で製作されたという点から考えて、京内造営に際して官が関与している部分のあったことを示すものであろう。

なお、参考のため大安寺南門・中門地区、講堂地区、東北僧房地区で奈良国立文化財研究所が参加した発掘調査で出土した奈良時代の主要な軒瓦の一覧表を掲げておく(付表)。

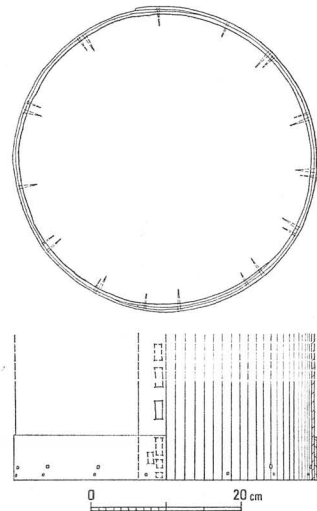
(註) 大和郡山市教育委員会『平城京羅城門跡発掘調査報告(第1次～第3次発掘調査)』1972年3月



第8図 軒瓦

(3) 井戸曲物 (第9図)

井戸 S E 1623 の井戸枠に用いられていたものである。高さ 16.5 cm まで残る。底部の遺存状況はよいが、上部の傷みはひどい。底板はなく、側板だけである。側板は厚さ 0.3 cm の檜の薄板を樺とじしたもので、内面には 1.5 cm 間隔の切り込みが縦に入っている。樺のと同じ穴は縦長で、平均寸法は縦 2.4 cm、横 1 cm である。側板底部には底板をとめるための木釘孔が上下 2 段にめぐっている。上段の孔はやや縦長で、縦 0.5 cm、横 0.4 cm、下段の孔は正方形で一辺 0.3 cm である。木釘孔が 2 段にあるのは、最初の底板が破損したのち、その上に再度底板をとりつけたためであり、2 度目の底板が破損したのちに井戸枠に転用したものであろう。



第9図 井戸曲物

3 ま と め

今回の調査区は、平城京左京六条三坊十四坪で、東三坊大路の西側溝と、十四坪の宅地遺構が想定される位置にあたる。発掘調査の結果、東三坊大路の西側溝は検出できなかったが、奈良時代末期の遺構を検出し、大安寺の西に隣接する区域の利用状況をつかむ資料を得た。

遺構面から下層は、粘土・砂・砂利が混在しており、この一帯が古くから河川流路にあたっていたことがうかがえた。調査区東部に想定された大路側溝も、後世の流路のために破壊されており、検出できなかった。

奈良時代の掘立柱建物は、調査区北西隅と、中央南端で 2 棟分検出した。S B 1621 は南側柱 2 間のみであるが、柱掘形は大きく、柱間寸法は 8 尺等間で、東に廂をもつ南北棟と考えられる。S B 1622 は、東西の柱列を検出した。これは南北棟建物の北側柱列で、身舎 2 間、柱間寸法 8 尺で、東に廂 (柱間寸法 7 尺) をもつ。柱掘形は S B 1621 に比して小さい。これら 2 棟の建物の柱痕跡から奈良時代後半の土器類が出土している。

平安時代前期に属する遺構は、今回の調査区では検出していない。

土壙 3・井戸 1 は、平安時代末期の遺構である。出土した土器類は、黒色土器・土師器・瓦器が主で、数量的には土師器が最も多い。これらをみると、黒色土器・瓦器は碗で、土師器は少量の甕・羽釜を除いて、ほとんどが皿である。各遺構毎の土器類の構成をみると、黒色土器と瓦器との数量関係から、遺構に若干の時期差が考えられる。S K 1626 は瓦器を含まず、最も古く考えられる。S E 1623 と S K 1624 は黒色土器と瓦器を出土しており、その数量は S K 1624 に黒色土器が多いのに対して、S E 1623 は瓦器が多い。このことから、S K 1624 が先行する可能性がある。S K 1625 は黒色土器を含まず最も新しくおくことができよう。

この一帯がいつ水田となったかはわからないが、今回の調査によれば、奈良時代から平安時代末期にわたって宅地として存続していたことは明らかであろう。